

大阪大学 大学院 学生員 恩地典雄
 大阪大学 工学部 正 員 毛利正光
 大阪大学 工学部 正 員 田中聖人
 大阪大学 工学部 正 員 山田 稔

1. はじめに

都市近郊の市街化の十分に進んでいない住宅地域において、住民に都市内高速道路がどのように認識・評価されているかを明らかにすることを目的とした。

2. 調査の概要

分析に必要なデータを得るために、1984年12月、大阪府堺市東部において、「道路等の施設整備に対する住民意識調査」を行った。調査地点としては、鉄道、幹線道路からの距離や用途地域の異なった40個所を選んでいるが、おおむね、大阪都心から1時間前後の市街化の十分進んでいない地域である。1世帯当たり3票の個人票を2000世帯に配布した結果、3215票の有効票が得られた。世帯回収率は84.5%であった。

3. 調査住民の属性と居住地区に対する意識

・調査住民の属性は比較的、老人層が少なく、在宅主婦が多くなったが、おおむね、地区の意識を代表させ得るサンプリングとなった。(図-1)

・居住地区に対する住み心地、愛着の点ではばらついているが、地区の改善意識は強い。(図-2)

・現在の交通施設に対する意識は、鉄道駅、バス停については関心度も満足度も高いが、都市高速・幹線道路については関心が低い。(図-3)

現在の道路を利用する住民は渋滞をひどいと考えている傾向が強い。(図-4)

4. 都市内高速道路に対する認識と評価

・全体として、「うるさい」、「うっとおしい」など悪いイメージが強いが、車を運転する住民の方が

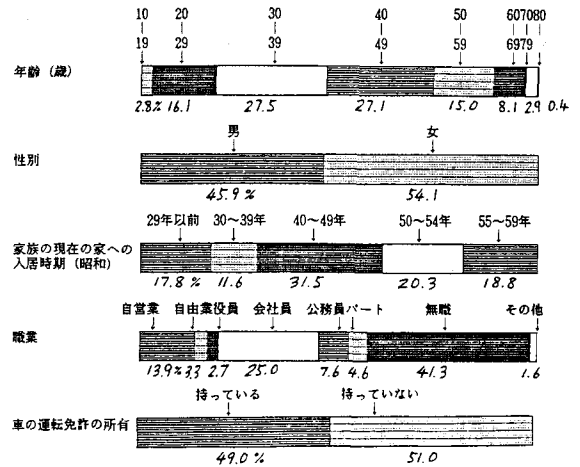


図-1 調査住民の属性

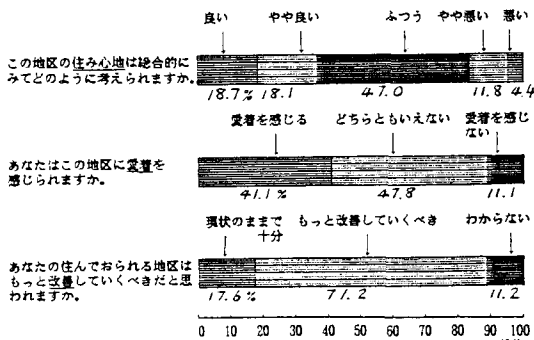


図-2 居住地区に対する評価

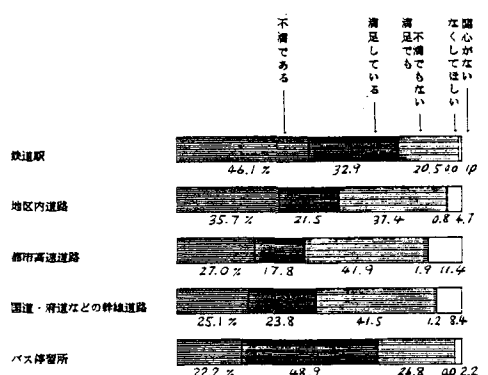
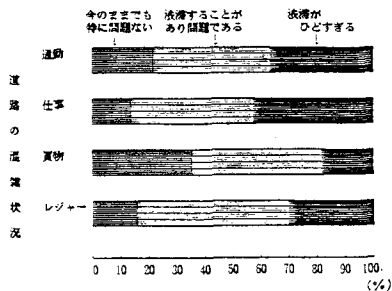
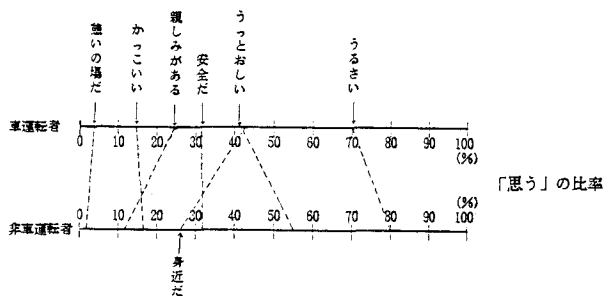


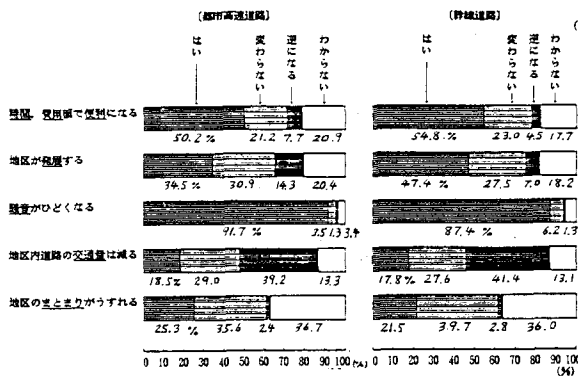
図-3 現在の都市施設に対する満足度・関心度



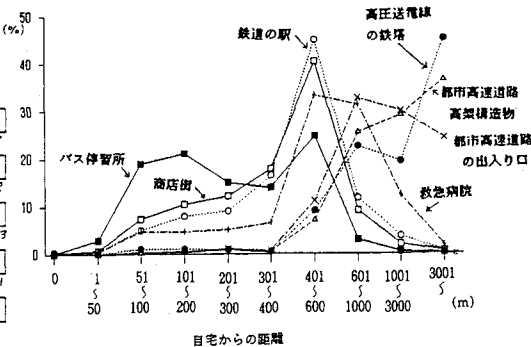
図一４ 車運転目的別道路混雑評価



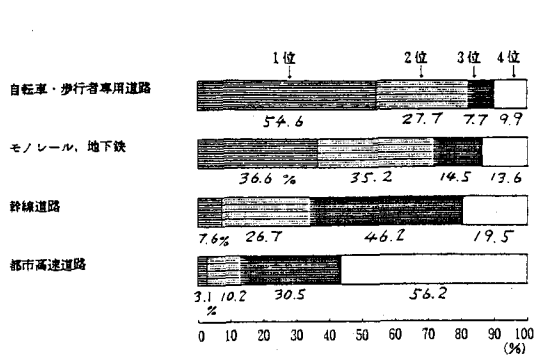
図一５ 車運転別都市高速道路のイメージ



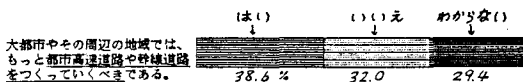
図一六 都市高速道路と幹線道路の地区への影響評価



図一七 各種施設の望ましい立地距離



図一八 交通施設の地区への建設順位



図一九 道路建設に対する評価

より親しみや身近さを感じている（図一五）

・都市高速道路の方が幹線道路より地区に対する悪い影響を与えていると考えている住民が多い。騒音以外の面では地区への影響についての意識にばらつきがある。（図一六）

・高速道路のランプの望ましい立地距離はおおよそ、400～1000m 一方、高架は3 km以遠。（図一七）

・自分達の居住地区には、高速道路の建設をするべきでないという意識が強い。（図一八）

・都市政策上は高速道路などの建設の必要性を認める住民もいるが、一方で、必要性を認めない住民、判断を下せない住民もいる。（図一九）

5. まとめと今後の課題

高速道路を含めた道路の便利さ、道路建設の必要性は少なからず住民は認識しているが、一方で、道路建設が及ぼす住民の生活への影響と不安をぬぐいきれず、道路建設を忌避する住民も多く存在している。特に高速道路については、その構造や利用形態ゆえに地区への影響をつかみ得ない傾向が強いと考えられる。今後さらに、意識構造分析を行い、道路建設に対する意識を同じくする住民グループの抽出を行いたい。